

史料にみる **歴** **史**

法隆寺と仏教

法隆寺
(写真提供:水産航空)

仏教は、古代インドで釈迦が始めた教えで、国王の保護で盛んになり、やがてアジア全体に広がった。わが国には6世紀に、まず私的に仏教がもたらされた。司馬達等らの渡来人たちは、草堂を結んで本尊を礼拝した。仏教が公的にわが国に伝えられたのは大王欽明の時で、百済の聖明王によって仏像と教典が伝えられた。公伝の年代について『日本書紀』は552年とするが、538年説が有力である。仏教は当初、異国の珍しい宗教、呪術の一種として受容された。素

朴な神の信仰しか知らなかった人々は、現世利益の教えや体系的な世界に驚き、仏教を導入するにあたっては抵抗も起きた。三蔵管理などを通じて渡来人と結びつき、開明的であった崇仏派の蘇我氏と、伝統的信仰を主張した廃仏派の物部・中臣氏とが対立した。この対立は、やがて蘇我氏が物部氏を倒す事件に発展する。両派の争いは、単に崇仏の可否を論ずるものではなく、朝廷内における主導権争いでもあった。

法隆寺は、聖徳太子が建てたと伝えられ、金堂や五重塔・中門などは世界最古の木造の建築として有名である。ただし、7世紀後半にいったん焼失したのちに再建されたと考えられている。『日本書紀』には天智朝に法隆寺が火災により焼失したとの記載があるが、法隆寺側の史料にはまったくふれられていない。そのため写真の西

院伽藍は寺の創立時から存続したとする非再建説と、天智朝に四天王寺式の伽藍配置をもつ旧法隆寺（若草伽藍、西院伽藍の東南に位置する）が焼失したのちに再建されたとする再建説が、明治20年代から対立し、論争をおこなってきた。おもに文献史家は『日本書紀』の記載を信用し再建説を、建築学者や美術史家は建築・仏像様式から西院伽藍の建物や仏像が推古朝にさかのぼるとして非再建説を主張した。論争は、若草伽藍の考古学的発掘により、若草伽藍の焼失後に西院伽藍が造営されたことが明らかとなった。

寺には、飛鳥文化を代表する多くの仏像や美術工芸品が残されている。この点が評価され1993年に日本最初の世界遺産として登録された。

(国立歴史民俗博物館准教授

仁藤敦史)